

財団だより

# 多摩川

1999.6 第82号



アブラコウモリ  
(ヒナコウモリ科)  
体長4～5cm。夏から秋の  
夕方、飛びながら昆虫を食う。



新しくなったニヶ領用水宿河原堰 ('99.3.27 左岸側より写す)

## ■多摩川現風景■

### (38) ニヶ領用水「宿河原堰」改築竣工

さる3月27日にニヶ領宿河原堰の改築竣工式がおこなわれた。5門からなる起伏式ゲート、1門の引上式ゲート、両側の魚道からなる堰である。堰柱も自然石、石張りに留意し、周辺の景観に配慮した造りとなっている。

1974年9月に台風16号により狛江市側の家屋が濁流に飲み込まれるという事態が生じ当時、自衛隊が出動し、堰の爆破を試みるなど人々の目をテレビに釘付けにした。

山田太一のテレビドラマ「岸边のアバム」では、川になだれこむ家屋の映像と、崩壊してゆく家族の状況が同時平行的に描かれた。

今回は「宿河原堰」の竣工と、「決壊の碑」の建立などがあったのだが、むしろ新しい試みとして、この堰の管理所の一部に「多摩川せせらぎ館」が誕生したことが注目される。

これは、多摩川を中心とした文化交流や情報発信の基地としてこの場所が設けられたものであり、建設省所有の建物を川崎市が管理・運営し、運営の内容は市民と川崎市とからなる運営委員会が決めることになっている。

市民が多摩川を軸とした交流の場をもつことと

なったのである。

現在、川崎市が取組んでいる「多摩川エコミュージアム」構想においても、この施設がサテライトの役割を担うのではとも考えられる。

一昨年の河川法の改正においても「地域の意見を反映した河川整備の推進」が大きくとりあげられており、この施設が市民と行政のパートナーシップの拠点として、力強く成長することが期待されている。

### ●関連する財団の研究助成

〈学術研究〉

- ①多摩川における河川空間の整備に関する研究—河川敷の土地利用、利水、治水施設と河川空間の形成—  
1978年 篠原 修 東京大学 (No.9)
- ②多摩川の水利開発史と水利調整に関する研究  
1982年 宮村 忠 日本河川開発調査会 (No.52)
- ③多摩川中流域における流域環境整備のための調査研究  
—より良い河川環境の創出を目指した流域環境管理計画手法の開発—  
1989年 井出久登 東京大学 (No.121)

〈一般研究〉

- ①多摩川をモデルとした「河川環境」の保全に関する住民参加型の手法、制度についての調査研究  
山道省三 多摩川センター (原稿作成中)

# 多摩川散歩

## ■玉川上水散歩マップ■

羽村市郷土博物館 宮沢 賢臣

羽村市教育委員会では、この度『玉川上水散歩マップ』というイラストマップを発行しました。これは、羽村市にある玉川上水起点の取水堰から、素掘りの堀として現存している杉並区の浅間橋（京王井の頭線富士見ヶ丘駅付近、中央高速道路高架下）まで約31kmを、散策に携帯して便利のように編集したものです。

編集にあたっては、「広報はむら」で市民を募集し、応募いただいた8名によって編集委員会を作りました。そして、それぞれの視点や興味によって、実際に何度も上水沿いを歩き、「散策する人」の角度からまとめていきました。したがって、歴史的なガイドブックとは趣を異にしています。

玉川上水は、もともと江戸時代の始め、承応2年（1653年）に開削された江戸の上水施設で、羽村から多摩川の水を引き、四谷大木戸（現在の新宿区四谷4丁目付近）まで素掘りの堀で通し、その先は土中に埋めた水道管によって江戸城や大名屋敷、江戸の町中に配水されていました。現在では、羽村取水所で取り入れられた多摩川の水は、水道源水として東京都水道局小平監視所までの間

にすべて浄水場等へ導水され、その先は「清流復活事業」により水の流れを復元しています。

『玉川上水散歩マップ』は1冊500円で販売しています。入手方法は、次のとおりお願いします。

① 直接、羽村市郷土博物館か羽村市役所1階案内係へ来ていただく。

② 郵送を希望する場合は、

(1) 本代500円×冊数分と送料を現金書留で羽村市郷土博物館まで送っていただき、折り返し送付します。

(2) 本代500円×冊数分と送料を郵便局の定額小為替と切手で羽村市郷土博物館まで送っていただき、折り返し送付します。

この場合、本代については定額小為替をご利用いただき、送料については切手でお願いします。

送料：1冊…180円 2冊…240円

3～4冊…310円 5冊…340円

5冊以上ご希望の場合には、羽村市郷土博物館までお問い合わせください。

◆送付・問い合わせ先 〒205-0012

東京都羽村市羽741 羽村市郷土博物館 まで

☎ 042-558-2561 ☎ 042-558-9956



▲「玉川上水散歩マップ」部分

## 私と多摩川



多摩川の源流・笠取山の山頂（'97年4月）

おやじの会いたか 木村 功

私は越中富山の神通川の畔で生まれました。それはイタイイタイ病で有名になった川で北アルプス立山連峰の雪融け水を富山湾へ注ぐ川です。子供の頃そこで水泳を覚え、釣りと川遊びを楽しんだ、川幅500mの大河です。

東京へ就職で出て来て住む場所を探しましたが、やはり故郷と同じ大河が流れる多摩川の沿線に足が自然に向いてしまいました。先ず初めに勤め先の事務所がある府中では多摩川へ歩いて10分のアパートに入りました。

30代になり自宅を建てようと土地を探すため京王線、南武線、中央線沿線をまわりましたが、やはり多摩川に近い南武線の中野島を選んでしまいました。

今の家は河口から25km、多摩川から50m程の距離にあり、夏の花火大会の時は花火の大音響で家全体が振動して家の中ではとてもいれない程です。翌朝は花火の爆発した後の丸い燃えかすのカラが庭に多数落ちていたこともあります。

我が家では8年程前から犬を飼っていますが、平日は妻が、土、日曜日は私が朝、夕各1時間の散歩の当番になっています。ですから毎週朝、夕4回犬を連れて多摩川を散歩し、四季の移り変わりを観察し、多摩川の鳥、草花水の流れ、

そして何よりも河川敷の大きな空間を楽しんでいます。この楽しさを他の人にも知ってもらおうと思い「たまがわネット」のホームページの“流域だより”の“中野島犬の散歩”のページに四季の話題を発信しています。

また3年前からは川崎市の「多摩川エコミュージアム構想」活動に参加しています。これは市民、行政、企業がパートナーシップで進める“多摩川流域全体を丸ごと博物館にしよう”の趣旨をもつ活動です。

多摩川流域の自然遺産、文化遺産、産業遺産を発掘し守り、保護してゆこうという運動です。

その中で私は広報プロジェクトでインターネットのホームページ編集を担当しています。

また、ふるさと遺産プロジェクトのグループにも入っています。これは川崎市を4つの地域に分け、私の住む多摩麻生グループではこの地区にある文化遺産、産業遺産を調査し、次の世代の人に伝えるために現状の保護と対策を考えたり、それをデータベースにしようと目下進めています。

今年3月27日には宿河原堰と管理棟の改修が完成しました。この管理棟の一部を市民の情報センターとして建設省から市民へ開放され「二ヶ領せせらぎ館」の名称で多摩川関係の情報提供の場として発足しました。

このせせらぎ館は行政と市民のパートナーシップにより生まれた大切な成果です。

今後、館の運営も市民とのパートナーシップで進める事になっています。一人でも多くの子供から大人までの市民の方々に多摩川に親んでもらうための交流の場であり、川に関する情報提供、情報発信の基地として有効に活用されるようにと思っています。

是非一度見に来て下さい(小田急線、南武線登戸駅下車、徒歩5分、二ヶ領用水取水口にあります)。

多摩川沿線に住んで30余年、多摩川を故郷として育つ次の世代に少しでもよい環境を提供できればと微力ながら頑張っている次第です。

よみがえ

## 甦れ！多摩川

## ■大沢川を歩く■

大沢川は延長3.5キロ、城山川（75号で紹介済み）の支流である。大沢川の下流端は城山川との合流点にある。八王子市の中央部を西から東へ向けて流下している一級河川である。

陣馬街道をはなれて、城山川にそい中央自動車道をくぐり500mほどゆくとV字型に大沢川が分岐流入してくる。両川の合流点と中央自動車道に挟まれた位置に、「横川下原公園」がある。目通り、50～60cmもあるような大きな樺が2～30本はあり、うっそうとした林となっている。樺の木立の中は、木道が雁行しており、歩くと、ひんやりとした空気が迎りにただよっている。二つの川からの十分な地下水に恵まれて、樺はすくすくと育ったに違いあるまい。これだけの林があるのは十分に理由があることなのである。

城山川にかかる「けやき橋」を渡って、左岸に移り、いよいよ大沢川を上流に向う。合流点あたりは水も豊富で、セグロセキレイが数羽盛んにとびまわっている。流れの両側は茂みになっており、川幅の1/3ほどが流れである。岸壁の水に接しているコンクリート壁には窪みの穴が連続して作ってあり、小魚や水生生物の棲家づくりを狙っているようだ。

「恵橋」に着く。岸の両側は住宅地になっており、ところどころに川の側道が外側に膨らまして、植えこみにしたポケットパークがある。つつじが花盛りで、新緑に映えて美しい。「関口橋」このあたりは岸のフェンスがワイヤの網の仕様となっている。軽快で、明るい感じがする。

「滝山下橋」を過ぎ、やがて「村長橋」という面白い名の橋に着く。地名は大楽寺町であり、村ではない。また、平成4年3月に新しくなった橋でもある。村長という名がでてくるのはたぶんこの地が昔は村であり、そのころ、村長さんが尽力して橋をつくったのだろう。だから、今もって「村長橋」なのである。橋の上から川を眺めると、菖蒲の花が黄色に咲いている。花が川風にゆらゆらとゆれて、まことに風雅な景色である。

すこし行くと、川に下りて行けるよう、側道から石段ができていますが、入口のフェンスにはがっかりと錠がしてあり、残念ではあるが、降りられない。石段を作ってはみたものの、ちょっと急でもあり、子どもがころんで、けがでもしては、ということで鎖錠してしまったのだろう。ちょっと残念である。

左岸側に、側道をへだてて「式分方小学校」がある。子どもたちの元気な歓声が響きわたる。ここにも、両岸に石段ができています。こちらは、緩い傾斜の広幅の石段が岸辺へ向けて降りて行く。岸と流れの間には草が茂っているので、水に近づきにくいですが、設計者の意図は「式分方小学校」の学童が、日野市の潤徳小学校にみられ

ような、ピオトープづくりを体験することを期待していたのではないかと思う。「川の水が増えているときは、危ないですから、中に入らないで下さい。」という標示が出されている。一級河川「大沢川」にもふりがながふっており、小学生でも読めるようになっている。

「戸割橋」に到着する。このあたりの土地は栗の木と、桑の木が植えられている。右岸の側道には、「大沢川」についての概略説明の掲示板が東京都南多摩建設事務所によりつくられている。

丘陵がだんだんと川の両側にせまってくる。「柳橋」に着く。橋のもとにはテントが張っており、数人の人が受付に座っている。地元にある柳沢観音講の祭祀行事が行われるようだ。橋は道路のカーブにあわせてあるのか、ゆるいカーブを描いている。この橋も最近新たに竣工したものである。

二人連れのご婦人がリュックを背負って、川歩きをしている。最近、川歩きをする人がふえてきた。川に接して、川を知ってもらうためにはたいへん喜ばしいことである。丘陵が迫ってきて、だんだんと山へ分け入って行く感じである。右岸に桐が薄紫の花を満開に咲いている。風が吹いて、枯れた笹の葉を巻き上げている。日の光に、きらきらと舞い上がる様は見事なものである。城山中学校への道を横切ると川はながれている。川の両側の田んぼには水が張られてあり、蛙の声が響き渡っている。

「小高橋」に着く。丘陵の裾にそって「大沢川」はながれている。東京都住宅供給公社の造成済みの住宅地があり、その一角に、「川町宮の下ちっぴ公園」がある。滑り台などの遊具があり、ブランコが人っ気一つない公園で五月の風にゆれている。住宅地のそばの木立の中には、椎茸のほだ木が組まれて行列していた。栗林もあり、腐った栗があちこちに散在している。琴平神社の前を過ぎて行く。道沿いに、草花の苗を売る店があり、大地があたり一面、カラフルな明るさに満ち溢れている。この辺りになると大沢川はずいぶんと細くなり、木立の中をみえかくれしている。都道191号線（上川口・宮の前線）で大沢橋となり、ここが上流端となる。この辺りは、霊園が多く、都立八王子霊園、八王子聖地霊園、青葉霊園などが都道をはさんで、散在する。「大沢川」は八王子市川町大沢橋から八王子市大楽寺町（城山川合流点まで）3.5kmを短いながら、なかなか興味深い川であった。

かわ せみ  
翡翠

## 〈平成11年度研究助成選考結果〉

去る3月5日第41回定時選考委員会を開催し、平成11年度の研究課題の選考を行い、学術研究11件一般研究5件が採用されました。研究課題は次のとおりです。

### 〔学術研究〕

研 究 課 題	代表研究者	所 属
酸化チタン光触媒による多摩川の水中の外因性内分泌攪乱化学物質の分解に関する研究	藤嶋 昭	東京大学大学院工学系研究科教授
多摩川の河岸土、底土、河川水の内分泌攪乱物質分解能とその強化に関する研究	大森 俊雄	東京大学生物生産工学研究センター教授
世田谷・多摩川における市民ボランティア、学生、行政のパートナーシップ型の河川舟運振興策と癒しの川づくりのための実践的な調査研究	長野 正孝	武蔵工業大学土木工学科客員教授
多摩川中～上流域の森林土壌からのN <sub>2</sub> O放出速度の地理的分布と窒素循環	土器屋由紀子	東京農工大学農学部 助教授
多摩川流域における蛍光増白剤の分布と挙動	高田 秀重	東京農工大学農学部 助教授
GISを用いた多摩川・鶴見川流域における都市化による水質汚濁シミュレーションと水質改善のための水循環モデルの構築	原 美登里	杏林大学 非常勤講師
高精度測定法による多摩川水系の水収支・物質収支の動態把握と河川水質形成機構の解明	大森 博雄	東京大学大学院理学系研究科教授
多摩川水系における水質の着色成分の状況と除去対策の検討	鈴木 昌治	東京農業大学醸造学科 助教授
多摩川流域における細胞毒性変動の調査、解析	酒井 康行	東京大学生産技術研究所 講師
多摩川河川敷におけるニセアカシアの分布拡大と生育環境に関する調査研究	池谷 奉文	(財)日本生態系協会 会長
多摩川源流域の山岳信仰と自然保護に関する調査研究	長野 學	跡見学園女子大学文学部 講師

### 〔一般研究〕

研 究 課 題	代表研究者	所 属
多摩川の源流に位置する奥多摩御前山における自然水とし尿の調査研究	山本 久子	東京都山岳連盟 会長
多摩川の洪水と環境変動 —近世多摩川洪水史と完新世段丘—	増渕 和夫	多摩川流域自然史研究会
環境教育、特にフィールドマナー（野外活動における倫理）の視点から捉えた多摩川の保全に関する研究	君塚 芳輝	フリー研究者
多摩川中流部（本流）における子どもの川遊びと水辺行動についての実体調査	上田 大志	多摩川センター サブスタッフ
多摩川河岸を汚染するプラスチック・ゴミ調査研究、主にレジンペレットの起源とその影響について	山本 洋司	東京大学大学院農学部 生命科学研究所 助手

## ▶▶▶ 寄贈文献の紹介 ◀◀◀

・「風景デザイナー感性とボランティアのまちづくり」  
著者 進士五十八・森 清和・原 昭夫・  
浦口醇二 1999年 (株)学芸出版社

風景学、景観論の入門から実践までを国内外の学説、歴史的建造物、絵画等を参考事例として具体的に解説し、また、自然を生かしたまちづくり、市民参加型まちづくりの事例を紹介している。

・「多摩川と語る—河口から源流まで歩いて—」  
編集・発行 多摩川と語る会事務局 1999年

「多摩川と語る会」が1993年9月から1998年5月まで多摩川の河口から源流水干までを27回に亘り毎回30人位参加し、植物・野鳥を観察し、まさに多摩川と語りながら踏査した記録集である。参加者の感想文も収録している。

## 財団からのお知らせ

### 第5回とうきゅう環境浄化財団 助成研究ワークショップのご案内

#### 「河川における有害化学物質 ～多摩川からの報告～」

最近、新聞やテレビのニュース等で環境ホルモン（内分泌攪乱物質）がよくとり上げられています。当財団の助成研究には、多摩川に存在するダイオキシン類等の有害化学物質に関する調査研究が多数あります。

今回はその中から三つ研究を選び、研究報告並びに討論を通して新たな環境回復の指針を探りたいと思います。

#### プログラム

13:00	開会挨拶	とうきゅう環境浄化財団 理事長	新井喜美夫
13:05	報告1	「多摩川水系の底質および水棲生物中のダイオキシンの分布に関する研究」 '93～'94助成 東京理科大学薬学部 講師	小野寺祐夫
13:35	報告2	「大気降下物による多摩川流域への汚染有機物の負荷に関する研究」 '93～'95助成 桐蔭横浜大学工学部 講師	森永 茂生
14:05	報告3	「多摩川河口・下流域の魚介類内分泌攪乱物質（有機スズ化合物とポリオキシエチレンアルキルフェニルエーテル系中性洗剤）汚染に関する研究」 '98～'99助成 東京水産大学海洋環境学科 教授	大槻 晃
14:35	休憩 (15分)		
14:50	総合討論会	コーディネーター とうきゅう環境浄化財団 評議員・客員研究員 コメントーター 東京農工大学 教授	芳村 重徳 小倉 紀雄
16:00	閉会		

日時／平成11年8月27日(金)  
13:00～16:00

場所／国連大学 5階  
Conference Hall

定員／100名

参加費／無料

主催／財団法人  
とうきゅう環境浄化財団

※駐車場はございませんので、  
車での御来場はご遠慮下さい。



#### 申込方法／

往復ハガキに住所・氏名（勤務先の場合は役職名、自宅の場合は所属団体名）各々の電話番号を明記し事務局までご送付下さい。FAXでも可（要返信FAX番号）

#### 申込み切／

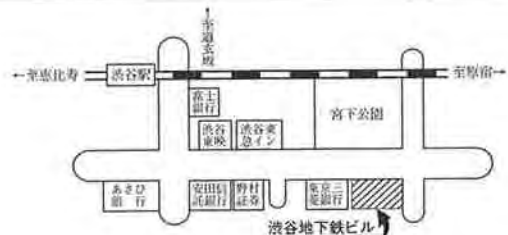
お申込みは先着順で定員になり次第、×切りします。（定員以内の場合は、8月13日×切り）

#### お申込み・お問い合わせ／

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1-16-14  
（渋谷地下鉄ビル内）

（財）とうきゅう環境浄化財団  
☎(03)3400-9142 ㊟(03)3400-9141

- 発行日 平成11年6月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14  
（渋谷地下鉄ビル内）  
TEL (03) 3400-9142  
FAX (03) 3400-9141



\*印刷所 雄文社 〒336-0001 浦和市常盤9-11-1 TEL (048) 831-8125